

「ミミズと共にエコ生活」(『日本経済新聞』2010年4月2日)

十年前にミミズコンポストを始めた。屋根に太陽光発電パネルを設置したので、空だけでなく大地でもエコっぽいことをしたくなったのだ。三層のたらい型容器とミミズ三千匹を三万五千円で購入。釣り餌になるシマミミズという種類である。

生ゴミを入れると、どんどん食って液体・固体の肥料に変えながら、二万匹まで増える。下層にできた堆肥をミミズごと庭に捨て、空になった容器を上重ねて、新鮮な生ゴミを入れてゆく。

バクテリア式処理機と違い、電気代など維持費はゼロ。しかも市に領収書と解説書を持参したら一万一千円の補助がもらえた。長期間放置しても生き延びるので出張や旅行も心配なし。簡便お得と言うべきだろう。

しかし始めの四年ほどは苦戦した。ウジムシの大量発生である。夏になると、アメリカミズアブ(ありふれたあの黒いアブ)が隙間に卵を産みつけ、幼虫軍団が容器を占拠するのだ。ゾウリ型で頭の尖った、堅い甲羅と剛毛を持つウジで、ザワザワひしめき合っただけでうねり、ミミズは底の古層へ押しまわられてしまう。

この幼虫ときたら、とてつもなく食欲で、ミミズの何倍もの速度で食いまくるので、重宝といえば重宝。とはいえ、彼らが優勢を占めると腐敗臭がするし、そもそも夏しか活動してくれないのが致命的。こいつらのせいでミミズ環境が壊れると、秋に生ゴミ処理効率がガタ落ちだ。そこでアブの駆除が必須となる。

ゴミを碎片化して腐敗を防ぐ、水道水でなくアルカリイオン水を使う、等々工夫したが、うまくいかなかった。

そこでソフト戦術を諦めて、直接対決路線へ。庭で生き延びたシマミミズが雨の日に地上へ出てくるのを掻き集め、別動隊を組織した。それをウジどもの上にドサッとかぶせてやる。底辺部にミミズ領土が生き残っているのだから、上からフレッシュな援軍を投入することで、アブをサンドイッチ責めにする作戦だ。これを何度でも繰り返す。

効果ありだった。アブ幼虫は激減した。毎夏飛来してせせせと卵を生みつけていくのは相変わらずだが、孵化しにくくなったらしく、ミミズの隙間にぼつぼつアブ幼虫が共存といった程度に。成分がすっかりミミズ向きに安定したようだ。

生ゴミの量と種類だが、私のように独り暮らしで三食カップめん+サプリメントという生活をしていると、茶葉やコーヒーかすくらいしか生ゴミが出ない。新聞紙でも段ボールでも喜んで食うミミズたちだが、滋養のあるものを与えて万全を期したい。

というわけで、ドリンク剤やジュースの空き瓶をすすいだ水、カップやきそばのもどし湯などを溜めて、ミミズ用の特製ブレンド水を作るのが日課になった。茶はティーバッグの使用量を二倍か三倍にして、出し殻をどんどん投入。ときどきアイスクリームやチョコレートも埋め込んでやる。塩分と柑橘類は厳禁。酸性化防止のため、卵殻を砕いてまんべんなく振りかけてやる。

ミミズを飼って逆に生ゴミが増えたような本末転倒感なきにしもあらずだが、茶は濃くなったし生卵も飲むようになったし、私自身の食生活もレベルアップしたような。

ただ、一度大失敗をやらかしたことがある。小麦粉や五穀米などを買って新品のまま投

入っていた時期があるのだが、片栗粉がいけなかった。べっとり厚い粘着層が形成され、ミミズがほぼ全滅してしまったのである。最上層にあっぷあっぷと密集し、ぐったり白い腹をみせての大量死。あれを発見したときほど私は愕然としたことはない。

ミミズというものは、五十匹ほど両手にすくって軽く握るとニョロニョロ冷たくて気持ちいい。まさにミミズセラピーだが、あの死骸群をすくい上げたときはジットリ蒸れて生温かくて、いや、今も心が痛む。庭からミミズを掻き集めてなんとか一から出直した。

そんな行き過ぎもありはしたが、ミミズへの気遣いはもはや私の生活の一部になっている。一匹ずつ名づけるほど個体認識できるには至っていないが、むしろ二万匹の集合離散全体が一匹みたいで、しかもなかなか知的というか、天気予報も得意である。蓋の裏にミミズがびっしり張り付いていれば、翌日は雨。かくもペットとしてのミミズの醍醐味は無尽蔵だ。

さて思えば私は、生ゴミ処理方面はいろいろ試しつつも、もう一つの重要産物である肥料を全然利用していないのだった。聞けば液体肥料で育てたトマトは二倍の大きさになるという。ミミズの醍醐味満喫のため、次は家庭菜園に挑戦かな。